

「美唄市における炭鉱関連施設・資料等の保存について」

On the preservations of the coal mining facilities and documents in Bibai

白戸 仁康

1. はじめに

白戸です。よろしくお願ひ致します。お手元に、レジメのようなものと美唄のパンフレット類をお配りしました。表に何故か焼鳥屋の宣伝が先にありますが（笑）、冊子（「美しき唄のまち・美唄」）の方には、どのような施設や炭鉱遺構が保存されているか、ということも紹介されていますので、後程ご覧頂ければと思います。また「アルテピアッツア美唄」の通信なども配布致しました。

さて、このワークショップにお誘ひ頂いた時、旧産炭地でアーキビストとして活動しているというようなことでしたが、レジメにも書きましたように、私はアーキビストというよりは萬（よろず）屋みたいなことをしています。1971年に美唄市内の中学校に赴任しましたが、実際にそこで勤務したのは7年間で、その後、美唄市郷土史料館の仕事などもやりながら、1995年から1999年までは札幌学院大学のA館で、北海道委託の戦時下朝鮮人実態調査のため、桑原先生のほか、本日お見えになっているほかの方々にもお世話になりました。そんなことで萬（よろず）屋談義のようになりますが、標題のことについては、おおむね1971年頃からの状況を、赤平市の視点とは異なる視点でお話したいと思います。

2. 地理的、歴史的背景

最初に美唄の地理的状況をお話しますと、

この焼鳥屋の宣伝パンフレットにもありますように、国道12号、JR、高速道路を挟んで石狩川までの西部一帯が低地帯で明治時代からの農村地帯、東側一帯は丘陵地。国道沿いと西部低地帯の方から美唄の歴史は始まり、簡単にいうと沼貝村という農村でした。後にはこの美唄川上流域にも農場が出来ますが、ここに三菱が進出してきたのが大正時代です。昭和に入り、このあたり、三菱の南側の中小炭鉱や、傾斜の少ない丘陵の農地を買収して、三井財閥が入ってきたのです。ですから美唄は、市制要覧の組写真をレジメの最後にも載せてありますが、国道12号線沿いから石狩川沿岸は農場などの畑作や水田地帯、そこでは各所で頻繁に洪水が起こって、と、そのような農村として始まったということですね。そのような背景を写真のアラカルトでご紹介しています。

さて、大正期に入り炭鉱が本格的に入ります。これが大正12年に完成した豎坑の巻



き上げ機ですが、この美唄川上流域一帯が大體三菱。こちらは昭和になり入ってきた三井の住宅街、三井の前身である日石光珠炭鉱の坑口、三井通洞坑の坑口などです。先程のアラカトにも出てきましたが、手選炭の時代の写真もご参考までに。このような写真類はこれまでに何とか、重複しているものも含めて数千点を発掘しています。

先程も言いましたが、美唄は国道12号線沿線から西部低地帯の農村で始まった。よく屯田兵が開拓したという話も出てきますが、それは国道12号沿いに屯田兵村が開かれ、その有力者が行政の役職について、戦後まで市政に深く関与してきたようなところから出てくる話ですね。いまでも「屯田兵が開いた」と耳にすることがあるのですが、この図のように、実際は、それ以外の低地帯の土地の方が広がったし苦労も多かった。ここが石狩川ですね。少し白っぽいところは戦後開拓地です。これは後でも出てきますが、この略図は大體、旧屯田兵村や各農場などにより土地が占有されていたという明治末期の状況を表しています。1926(大正15)年に美唄町、1950(昭和25)年に美唄市になりますが、左の図は美唄の人口の推移です。明治末期までは1万人そこそこ。当時もまだ沼貝村といったのですが、1920(大正9)年の第1回国勢調査で3万2,321人と3倍くらいになる。簡単にいうと三菱が事業を拡張していく時期にあたります。やがて三井も入ってきて、戦時中もどんどん人口が増えて戦後も伸び続け、1956年には9万2千人に達します。この図は1955年の国勢調査ですので8万5千人ちょっと。1960年前後はピークを維持しますが、やがてエネルギー政策の転換で、1963年に三井美唄炭鉱が大型閉山となります。大型閉山第1号と言われています。

そして三菱美唄も縮小し、転職したり南大夕張炭鉱の方へも移動して、このあたりから、ぐんと人口が落ちます。少しデータが古いの

ですが、昨年(2009)の12月に2万7千人まで減少しました。このカーブは、空知の人口の推移と非常によく似ています。右側の統計表は空知の人口ですが、第1回国勢調査で34万9千人、ピークは80万人、現在は38万人。が、昨年12月にこの38万人を切りましたね。美唄の人口と空知の人口が、同じピラミッド型になっているのです。これは、美唄と他の旧産炭地との大きな違いだと思います。

これは西側から見た1950年の美唄市鳥瞰図です。下部が石狩川と西部農村地帯。真ん中を南北に国道12号線が伸び、ずっと南に富士山も描かれていますから吉田初三郎さんの鳥瞰図と分かります。ここが中心市街地、ここが農村地帯。美唄鉄道が走っていて、美唄川上流域を三菱が炭鉱を開いています。三井は南美唄鉄道を自前で作って国鉄に寄付し、広大な鉱業用地に生産拠点や住宅地を集約して独自の文化圏をつくります。そこで美唄が市になった時、当時の『北海日日新聞』が「美唄は三菱文化と三井文化と農村文化で出来ていて、この三つでやっていって市が上手くいくのだろうか」と書いています。結果として、それぞれが分離・分割しないで現在に至っている。そして炭鉱閉山後は、農業が基幹産業となり中小商工業も一部残って、三井地区は一般住宅地となった。人口の推移が空知全体に近いカーブを描いている理由は、そんなところにあると言えるかと思います。三井と三菱と言いました。他にも小さい炭鉱は幾つもあったのですが、多くは三井系列か三菱系列なのです。

3. 三井・三菱二大財閥系炭鉱

では、その三菱・三井美唄両炭鉱の全国的位置がどのようなものだったかと言いますと、この表は1944年の上期の出炭量ですね。グントツに三井三池、2番目が北炭夕張、4番目に三菱美唄、9番目に三井美唄が入っている。三菱美唄炭鉱は三菱鉱山の主力鉱でし

た。美唄というのは、一つのまちに三菱・三井の二大財閥系炭鉱が拮抗して存在していたのですね。ということで、今日は三井と三菱を中心にして話を続けていきたいと思います。

三菱美唄は、この美唄鉄道線の東明駅、今でも駅舎は残してあります。これが旧栄小学校、後程出てくるアルテピアッツァ美唄です。美唄鉄道と美唄川に沿って三菱の鉱業用地が展開し、兩岸の山腹にはウナギの寝床のように集落が点在し、その間に我路、美唄炭山、最後は常盤台という駅がありました。この上にも大集落がある。このように三菱の場合はなっていました。つまり、地形的な特徴が、三井と三菱では大きく違っていたのです。

これは三井ですが、函館本線美唄駅から南美唄線が走っていて、ここ一帯が小高い丘陵地ですね。農場を買収して鉱業用地も炭住街も一かたまりにして、一山一家意識の非常に強い炭鉱だったと言えます。これは三井側から撮った写真で、上部右手は美唄市街地、左手は低地帯ですね。三井美唄の住民には、自分たちの住む場所が美唄だという自負があった。比較的近い美唄市街地のことを、「下(しも)の美唄」と呼んでいた。戦後の座談会記事にも出てきます。「下の美唄から来た連中は…」云々と。炭鉱の劇場では、毎日タグのような映画などをやっていますよね。吉田さんもお聞きになっていると思いますが、封切り映画などが劇場に来ると、社外からも人がやってくる。料金は、2円99銭とか4円99銭。そこで、お前らの入る所ではないと言ったとか言われたとか、まあ、話が少し外れましたが。

三井の地域、現在の南美唄町を拡大した写真で見ると、こちらが鉱業施設で、病院や事務所などはこの一の沢の川沿い。一の沢を挟んだこの辺は今でも残っていますが、職員住宅です。一方、右手の一帯は鉱員住宅。ここに大通りが走っています。映画館や鉱山学校



上空からの三井美唄炭住街 (1955年)

などがこのあたりに並んでいて、高台には広大なグラウンドもある。住所で、大通り何丁目とか下何条とか言うのと、鉱員住宅、北町何丁目というのと、ああ職員住宅、とこのように分かれていた。



三井美唄炭鉱の住宅街 (1941年)

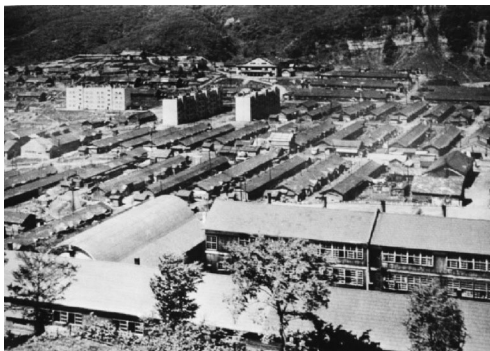
こちらは北町、中町などで職員住宅。そして右手は大通り1丁目から7丁目までであり、上1条、上2条、上3条、下1条、下2条、下3条と。ただ一見しますと、いわゆる長屋という雰囲気とはちょっと違いますよね。これは1941年の写真ですが、2戸建て4戸建ての整然とした住宅で、各戸には花畑もあります。当時の新聞にも華々しく宣伝されていました。日本一、綺麗な炭鉱住宅街だと三井は宣伝していたのです。そして、これは1948年頃、戦後の住宅街の写真で、緩やかな丘陵地になっているのが分かります。これは、その上からの夜景ですね。右手上方にちらちら明

かりが見えるのが、「下の美唄」と呼んでいた美唄市街。鉱業所では社内報を出していましたが、その新聞名も『美唄』です。三菱の社内報は『三菱美唄』。映画やバレエ公演、演劇・音楽発表会やスケート大会など、山内のあらゆるものが紹介され、炭鉱文化の一番華やかな時期の様子で、これは1951年の社内報です。

三井からの1948年の夜景写真を見ると、左上上部が真っ暗で、戦後開拓地です。こちらの写真は、三井が満艦飾になっている頃と同じ、1948年の戦後開拓地の写真ですが、一面に泥炭地が広がり芦拭きの小屋で、明治期さながらの様相です。この人物が指さしている向こうに三井美唄があるわけです。同じ美唄の同じ時期に、こういうランプ生活をしていたのが戦後開拓地です。この人たちが、よく美唄を屯田兵が開いたなどと言われるけど、我々はずっと苦労したと、そういう話が出てきます。

話がそれましたが、いずれにしても、1948年の戦後開拓地の写真をお見せしましたが、ここが全部電化されたのはいつかという、三井美唄炭鉱が閉山された1963年です。美唄では、三井閉山の年になって戦後開拓地がようやく全て電化されたのです。それまではランプだったのです。ですから、この地域の人たちからは、夜になると向こうの満艦飾を見て暮らしていたという話が、今でも出てきます。そのように美唄というのは農村と炭鉱があり、そして同じ炭鉱でも、三井と三菱では地形的にも非常に大きく違っていた。

こちらが三菱です。三菱の夜景を見ますと手前に明るい集落の固まりがあり、この辺にもこの辺にもあり、こちらの高台にもあって住宅街が散在しているのが分かります。美唄鉄道は奥の常盤台駅というのが最終駅です。この周辺を豎坑地区というのですが、炭鉱施設群の中央部に豎坑の巻き揚げ機が見えます。豎坑はエレベーターで170メートル下る



三菱美唄常盤台地区住宅街（1963年）

と、地底を蜂の巣状に坑道が伸び、坑内電車が走っている。こちらは通洞坑です。坑口から山腹に向かって2キロほど電車で入り、ここにもまた蜂の巣状に電車が走っている。というような地域です。何故、常盤台駅というのか。この道をずっと上がって行って、この集落が常盤台というのです。三菱地区の一番奥の大集落の一つです。写真は常盤中学校から見た全景の4分の1ほどです。小学校や中学校、映画館などもあって、美唄で一番標高が高い水洗便所のある鉄筋アパートが出来て、やがて、閉山となるのです。長屋もあります。これが長屋だというのはお分かりですか。三井と違い、三菱の場合は、最後まで長屋が多かったのです。居住条件もかなり違ったのです。

4. 炭鉱閉山時とその後の特徴

各炭鉱の特徴などが長くなりましたが、これらの炭鉱が閉山するわけです。そのとき炭鉱設備・施設・住宅などはどうなったか。先程の吉田さんのお話のように住友の場合は色々な機材が残りました。ですが、三井美唄閉山が1963年、三菱美唄が10年後の1972年ですが、三井も三菱も全部政府の買い上げ方式による閉山でした。石炭埋蔵量も生産資材も、生産に関わるものを全て金に計算して国が企業に払ったわけです。退職金も払った。ですから、生産設備は全部廃棄したり、坑内



閉山後の三菱美唄住宅街撤去状況

ここは、ご存じの方も多いかと思いますが、1945年12月、後の炭労の前身である北海道炭鉱労働組合、北炭連の創立大会が開かれた宮ノ下会館という場所で、46年には「人民裁判事件」の舞台ともなった歴史的な建物ですが、みんな壊してしまいました。この映写室も今はありません。こちらは、先程の常盤台の大集落跡です。写真は、三菱南大夕張に移った人たちが、美唄の閉山から4年後、故郷の三菱美唄に戻ってみようとバス2～3台で訪れたことがあるのですね。ところが、建物は全部壊されていますから、常盤小学校の校庭跡でみんなで弁当を食べたりしているのです。一番困ったのはトイレですね。そのような話も色々と記念の寄せ書きノートなどに残ってしまっていて、これは何とかしなくてはいけないというような話も出ていました。



常盤小学校庭跡 (1976年)

5. 資料の収集・保存、炭鉱遺構活用の推移

5-1 第一期：1971年～1980年

では、それらの炭鉱関係の遺構や遺産、資料を、どのように保存、活用して現在に至っているのか。閉山後30年～40年以上経っていますから、大体、それを3期くらいに分けることが出来るかと思います。個々の具体的内容については、レジュメにも箇条書きで書いておきましたが、一期目は大体1971年から1980年くらい。

まず、三菱美唄炭鉱閉山直前の1971年に、市立美唄図書館が新築、落成します。63年に三井が閉山した際に旧三井美唄図書館の図書3千冊が寄贈されて以降、図書館では、一般図書のほかに郷土資料の整備や目録作成も行っていたのですが、新築落成と同時に付設したのが、郷土資料室です。これを併設して、本格的に文献資料の収集・整備に乗り出しました。「郷土資料目録」もガリ版刷りやタイプでしたが、やがて一般図書と合わせてデータベースにまで発展し、道内でもいち早くネットで公開するようになりました。現在もインターネットで検索できます。新聞原紙の保存もしていますし、美唄の大事な図書や文献類は図書館にということもあって、郷土史学習の拠点になっています。

そして1974年、三菱閉山の2年後に、図書館とは別に、古い建物を利用して「美唄市郷土資料室」というのを初めて作りまして、農機具類から教育、文化、生活、炭鉱資料などの収集・保存、整理を本格的に開始しました。ここに、文化財保護委員や郷土史研究会の会員なども屯しましてね、展示活動もやろうということで翌75年に「美唄市開拓資料室」と改称して、一般公開を始めました。仮展示ですから、たいした展示には出来なかったのですが。

開拓資料室としたのは、美唄の歴史は農村から始まったからですね。炭鉱施設は全部壊

されましたから、ヘルメットとかキャップライト、個人で所有していたものや破壊を免れた保安器具、生活用具、文献や写真、地図・図面類や一次資料など様々なものを、市民から寄贈を受け、みんなでかき集めて持ち寄るのです。公開をきっかけに、資料も随分と集まって来ました。炭鉱OBも残っていましたから、資料の残存状況調査や残った人々からの聴き取り。職員と鉱員とでは全然話の内容が違いますし、同じ鉱員でも、組合の元幹部と一般の組合員では180度、異なった話もする。それも大事だということで、徹底的に聞き取りや座談会をやりました。録音して記録化したのですが、この開拓資料室が、1980年には郷土史料館設立準備室になっていきます。

この第一期で次に市が行ったのは、三菱跡地を使ったスキー場と「我路ファミリー公園」の開設です。三菱の場合、上流から順番に壊していきましたから、先ほど、トイレも無いという話をしましたね。それでは、旧中学校体育館を休憩用レストハウスにしようと。そして、それも活用してスキー場を開設したのが一つ。これが1975年です。それから2年後に、スキー場向かい側のグラウンドや高級職員住宅跡地に、キャンプ場をもつ「我路ファミリー公園」というのを作りました。そのとき、三菱鉱業の後進、三菱マテリアルが公園の一角に休憩所を兼ねて「三菱美唄記念館」というのを寄贈してくれ、そして1980年に、旧美唄鉄道東明駅に駅舎と市指定文化財のSLが残されていましたので、東明駅とファミリー公園を繋ぐサイクリングロードが開通します。

この写真は、三菱の奥の方から見ているのですが、左側が番町という職員住宅。美唄川を挟んで高級職員住宅跡。沼東中学校や市役所の東美唄支所の向かいが、グラウンドになっていました。ここは我路町、炭鉱をあてにして出来た市街地ですね。最盛期は500戸を超

したのですが、閉山後もこの時期には、まだ大分残っていました。現在でも10戸くらい残っています。そして左手の職員住宅街（番町）の背後の高台が、1920年に日本で初めて夜間照明付きスキー場が出来た場所なのです。むかしは、番町が丘スキー場といいました。そういういわれもある場所にスキー場をつくった。

グラウンドを利用して公園や休憩所をつくる。美唄川を挟んだキャンプ場には古い鎮魂碑。これが三菱美唄記念館ですが、「九州では、いまでも補償交渉で灰皿の投げ合いをやっているけど、美唄ではそんなことは無いだろう」などと交渉しましてね。三菱地区の大きな写真パネルや大型の鉱区図面、鉱業所の立体地形図、大正時代の奉納額、友子関係資料や保安器具、優勝旗類なども展示しています。以上が大体第一期だと思います。SLは現在も野外展示ですが、美唄鉄道SL保存会（美友会）が整備してくれています。

5-2 第二期：1981年～1991年

第二期目は、1981年の美唄市郷土史料館開設から、91年の「炭鉱メモリアル公園」開設までの時期です。先程話しました郷土史料館設立準備室に合わせて、1980年に考古学や動植物、炭鉱など各産業専門分野の委員7人からなる、史料館の展示設計専門委員会ができてね。私も加わって、全体構想や展示シナリオ作成なども業者任せではなく、ほとんど自前でやりました。特に展示構想や展示設計は、準備室と郷土史研究会のメンバーなどが一緒になって、5、6年がかりの調査結果や集めた資料がかなり蓄積されていました。もちろん、炭鉱中心の施設ではありませんが、郷土史料館建設、これが第二期の頭です。細かい経過や具体的内容はレジュメにも書いてあります。常設展示室のほか、視聴覚ライブラリーのことなども色々。炭鉱の戦前、戦後の記録映画などもビデオ化して、完成したの

がこの「美唄市郷土史料館」ですね。市民の寄付もあって、まちの真ん中に造りました。常設展示室は、ご覧のように6部構成で、第4部が炭鉱です。当初1億8千万円の予定でしたが、館長室などは不要。かわりに、特別展示室や炭鉱映画などを上映する視聴覚室、体験学習室、作業室、研究室、収蔵庫などは絶対に必要だと主張して、当時の金で3億円になりました。とにかく炭鉱の歴史を含めて、歴史的資料の総合的な収集・整理・保管、研究や学習活動の拠点、そして、総合展示の母館として郷土史料館を建てました。



美唄市郷土史料館 (1981年)

ところが、先程も述べましたように、写真や文書資料などは別として、炭鉱施設の方は全部撤去されていて希望通りのモノが揃わないわけです。これは坑内を模式的に復元した様子ですが、切り羽の支柱などは、業者が一度組んだものを、支繰の人たちが残っていましたから実際に組み直してもらいました。坑内の機具やレール、ワイヤーなどは、三菱南大夕張炭鉱まで行って古い機材を寄贈してもらったり、木製トロッコなどは昔捨てられたのを谷底から掘り上げたりして、出来るだけ時代に即して。

この写真は、炭鉱ではなく第2部農業の開拓小屋です。一年前から地域の人に葦を刈って干しとってもらい屋根を葺いてもらったのですが、こちらの設計図で葺いてくれた高齢

の方が、これは貧相過ぎると言って屋根に稲藁を入れてしまったのですね。仕方が無いから説明板に、屋根は藁が手に入るようになってからの状況を模式化しましたと入れている、そんな笑い話もあるのですが、高さ2メートルの泥炭標本は、泥炭地試験場の協力を得て掘り上げたり、そのようなことも含め、郷土資料室時代から関わってきた文化財保護委員とか郷土史研究会の会員なども何かと関わって、史料館開設にこぎつけました。

写真や図面、文献類などはほとんど史料館に収納したのですが、1985年には、美唄市郷土史研究会として国書刊行会から写真集を刊行します。また、それまで『美唄市史』(1970年刊)もあったのですが、全面改定する方針で『美唄市百年史』の編集作業にも入っていました。こちらの編集・執筆もすべて市内の人間があたり、刊行が1990年ですね。郷土資料室時代の聞き書きがとても役立ちました。重要視したのは徹底的に出典資料の明示、所在も含めた資料・文献目録の作成などで、これらは編纂事務局があった行政資料室に残しました。

百年史が刊行された1990年に、三菱の豎坑地域に残っていた豎坑巻き上げ機2基が、修復されました。三井は自前の土地ですが、三菱は鉱業用地として国有林や道有林も使ってきましたから、全部植林して返却するわけですね。ここは道有林に入っている。道からは10年以上前から「危険だから壊せ、壊せ」と言われてきたのです。その度に一応私どもにも話があるのですが、「ダメだ、あれは鎮魂碑だ」とか色々なことを言いましてね。壊させなかった。この間に大槻文平さんが、ちょうど日経連の会長を辞めて土光さんのあと臨調(臨時行政改革推進審議会)の会長を引き受けた、その前後に美唄に2回来ているのです。

その時、「美唄は、文平さん、文平さんと歓迎してくれて、九州のように手がかからなくて良いでしょう」と話した。「だから、これを

何とかして欲しい」と。実は、見積もりをとったら、危険な部分を取り払って塗装、保存するだけで1千万円かかると言われていた。その話をしたところ、「よし」ということになって、1990年に三菱南大夕張炭鉱がこれを修復して寄贈してくれたわけですが。ここは、土砂の崩落を防ぐため残っていた原炭ポケットの一部、そして豎坑閉開所、その向こうに通洞坑坑口がある。大体3.6ヘクタールですか。跡地に何か作ったらどうかとアイデアが沢山出てきましたが、それは駄目だと私も反対しました。一部植林以外は芝生にして、あとは、通洞坑口までの散策路程度にしてということになった。そこで道の方でも、「炭鉱メモリアル森林公園」として造成しましょうということになり、これらが残ったというわけです。



炭鉱メモリアル森林公園 (1991年)

何故これを残そうと思ったかという、一企業や一時期を超えた歴史の光と陰を併せ持つ歴史的遺産としてであって、三菱の主力坑だったとか、もちろんただの懐古趣味や単なる観光目的からではない。例えば、この通洞坑では1941年の大ガス爆発で177人が亡くなり、今でも53人が埋没したままです。この豎坑の地下でも何度もガス爆発などがあり、先程の統計にもあるように、1944年のガス爆発では入坑中327人のうち109人が死亡、うち朝鮮人だけでも70人、函館提灯組合の勤労報国隊の人たちも11人亡くなっているとか。

そうになると、鎮魂碑なのでもあり、また単に三菱美唄だけの歴史の問題でもない。大槻さんには鎮魂碑だとは言わなかったのですが、巻き揚げ機は、大槻さんの力で三菱南大夕張炭鉱が修復してくれた。そして、修復、寄贈してくれた年(90年)に、三菱南大夕張炭鉱は閉山するのですね。その2年後(92年)に大槻さんは亡くなるのですが、良い時期という語弊がありますが、粘った甲斐があったと思っています。

5-3 第三期：1992年以降

さて、第三期は、1992年の「アルテピアッツア美唄」開設から、市が『写真で見る美唄の20世紀』を発行した2001年までですが、話は現在の状況までになります。

その後も三菱地区の炭住街は、このように、奥から次々と壊され、学校も閉校していきます。これは、三菱地区で最後まで残った栄小小学校です。美唄としても三菱美唄地区としても、国民学校時代の最後に開校した学校でもあるんですね。お手元のレジュメに1881年閉校とありますが、もちろん1981年3月の間違いです。つまり、三菱が閉山してから9年から10年、閉校した地域や落合町とか栄町など近隣の子どもが、多いときは1,250人が通学していたのですが、ついに62人にまで減少し、小学校の再編で1981年に閉校になったのです。その後、隣接していた栄幼稚園が旧校



三菱地区最後の栄小小学校 (1955年)

舎の一部に移ったり、体育館は地域で使ったりしていたのですが、近隣の幼稚園児も少なくなり、体育館もあまり使われなくなったということで、1990年頃に、市の中からこれも全部壊してしまうという話が出てきたのです。

当時の教育長がつくった5、6人の私的諮問機関で論議しました。全部壊すのはいつでもできる。グラウンドを含めて活用方法を考えた方がいい。校舎や体育館の形態を残しながらキャンプ場とか、バンドをやっている青年たちがドラムをたたいても、これだけ広かったら迷惑はかからないだろうとか、色々な話をしている最中に彫刻家の安田侃さんも話に加わったことがあって、安田さんも活用賛成してくれました。景観そのものも貴重だとか何とか話し合っているうちに、当時の文化庁で、旧校舎の有効利用に補助金を付けるという思いがけない話が入ってきました。1991年のことです。

市教委の職員が確認した結果、これは旧体育館ですが、この中は手を入れずにそのまま残そうと。この写真は安田さんの彫刻ですね。旧体育館は、彫刻展示のほかコンサートや講演会にも使う。校舎は幼稚園のほか、なるべくそのままの雰囲気に残してミニ展示場などにも使う。グラウンドも芝生にしたり、彫刻の野外展示にも使って、芸術文化交流施設。よしこれで行こうということで、第一号で補助金を付けて貰ったのです。行政というのは補助金がつくと、今はむしろ困ることも多いのですが、当時はまだ予算が起し易かった。翌1992年に開設して、施設名は安田さんの案で「アルテピアッツァ美唄」となりました。

最近の「Arte 通信」がお手元にもあると思いますが、現在は、栄幼稚園以外の部分を「NPO法人アルテピアッツァびばい」が運営しています。栄幼稚園は、美唄で一番入園希望率の高い幼稚園で、希望者が多く抽選で決めることもあります。写真は、旧校舎のここ



栄小学校跡に開設した「アルテピアッツァ美唄」

が幼稚園、2階が市民ギャラリーなどですね。このNPO法人の定款の中にも「炭鉱に関わる歴史的遺産」の継承という一項が入っていますね。アルテピアッツァ独自の講演会や講習会、展覧会、演奏会、イベントなどが行われるほか、通信にも、毎号「炭山（やま）の記憶」欄があります。例えば2008年12月号には「我路（がろ）今昔物語」。住民からの取材記事と昔の写真、この古い市街地や映画館の写真は郷土史料館の提供です。

史料館でも、特別展や特別展示室開放事業、映画会、体験学習、野外見学会などもやっているのですが、1999年になって、すでにこちらで何度も話が出ているかと思いますが、例の空知支庁の音頭取りによる「炭鉱（やま）の記憶再生塾」なるものが、美唄にも出来ます。前の年か、市役所の窓口になっている担当者から私にも話がきたとき、ネットワーク作りや活動協力は結構だが、個々の具体的事業はそれぞれの町のやり方があるのであって、どうも目的や意味が分からないと話した。そこでいったん立ち消えになったと思っていたら、結局は、塾長と塾生という会員20人で発足します。うち4人が役所の窓口の職員で、実質会員は15、6人。中心メンバーは大体、郷土史料館の嘱託経験者や協力員、郷土史研究会などの会員とか、みんなグブっているわけですね。しかも、断るのは誰それに悪いので顔だけ出すといった人も入っている。そも

そも美唄の郷土史料館は、開設時以来、一般市民や民間団体などの協力で成り立っていた。協力員もいますが、特別展や体験学習のほかフィールドワークでも、郷土史研究会の会員がシナリオや資料づくりまでやっている。

記憶再生塾の事業には、資料収集や発掘・蓄積、聞き書きや記録、写真展、見学会、イベント協力などいろいろ入っていますが、何のことはない、郷土史料館を中心にして全部やってきていたことなのです。写真展といっても、多くは史料館の写真や、2001年に市が刊行した写真集（『写真で見る美唄の20世紀』）で使ったものなどをパネル化して、年に1回、お盆などに展示するものですが、聞き書きや記録というのはきわめて難しい作業です。目新しいのは、ご覧のような、炭鉱施設のガイドマップの作成、その無料配布やインターネットによる情報発信。大急ぎで作ったマップは、空知支庁で出した『そらち・炭鉱（やま）の記憶マップ』の美唄版です。市教委や史料館などでも、ずっと炭鉱関係も含めた「文化財マップ」を計画してきたんですが、結局は、予算がつかなかったのに、これには簡単に予算がついた。率直に言うと、目的や編集方針、取り上げている内容の基準も明確とは言えない。

HPのことは後で触れますが、そのうちにイベント協力の一つなのか、観光バスの添乗ガイドの依頼まで入ってきた。シナリオなどもなく、とにかくバスが行くので一定の時間内で案内して欲しいと。最近は会員数も、役所の窓口職員を入れて10人を切っている。実は、発足時の塾長がお亡くなりになり、二代目の方も高齢でご病気なので辞退するという事で、空知支庁の窓口兼事務局の役所の担当者が、事実上の代理をつとめている状態です。職員には別に炭鉱の知識があるわけではない。塾生の中には、炭鉱の話を知りたいから入会したという会員や高齢者もいる。バス

ガイドのやり繰りにも困って、昨年あたりは郷土史研究会の会員で、炭鉱とは直接関係がないけど義理で入会している者があつたようですが、頼まれた本人も困ってしまうわけです。

記憶再生塾の最大の功績は、ホームページを開いたことだと思います。かつてはウィンドウズもインターネットもない。MS-DOSやパソコン通信で細々やっていたが、今や調査や情報環境が革命的に変わり、美唄市でも積極的にITを活用している。そこで、HPも役所の担当職員が作って、そしてお金も出して、HPにはこのように、美唄の炭鉱概説や年表のほか、「炭鉱写真集」や「炭鉱施設マップ」の頁などがある。ベースは先程のマップに統計資料などを加えて2003年に作成した『語りかける・びばい・炭鉱（やま）の記憶ガイドブック』ですね。これも即席で視覚重視の簡便な編集ですから、写真の時代も判然としないなど取り扱いに問題はあるのですが、情報提供活動としては画期的だと思います。ただ、こういったHPは本来、問題点を訂正・補強したり、新たな資料や調査事項を補強して更新していくわけですが、残念ながら、このHPの更新は2003年で終わっています。

再生塾の写真展の方も、史料館やアルテピアッツアの市民ギャラリーなどでやって、観た人たちが昔を懐かしがっていたと聞いていましたが、これもネタ切れして困ったと。ただ並べるだけでは、新しい資料が簡単に集積されるものではないですから。ですが昨年は、同じ観客が来るわけでもないし、以前と同じ写真が入っても、テーマや展示構成によって雰囲気は大きく異なるから、と私からも話して何とかやりましたが、今年はおそらく、人手の問題もあって無理かと思います。座談会や聞き書きも同じですね。目的により、人選や記録も大変です。それ自体が歴史調査の方法として専門的な分野です。話の信憑性の問題もあって、整理もなかなか上手く行かない

と言うことで、以上、美唄における炭鉱の歴史や地理的条件、閉山・撤退方法など各炭鉱の特色についてお話しした上で、おおむね1971年以降の標題の状況についてお話ししました。美唄の場合は、炭鉱閉山後、30年ないし40年間以上かかってようやくここまで来ました、と言いますか、一応、以上のような経過を経て、現在はこんな状態にありますと言うか、そんなことを大急ぎで話させて頂きました。

6. 課題—おわりにかえて

課題は山積していますが、幾つかレジュメにも書いておきました。一番困るのは、先程も幾つか施設のご紹介をしましたが、所管が、教育委員会とか、総務部とか、都市整備部だとかに分散していることです。炭鉱メモリアル公園に行っても、もう10何年も経つのに巻き揚げ機や開閉所、通洞坑口などに簡単な解説板も無い。草刈りもさんざん言ってやっとやってくれる。施設の保守・整備だけでなく、事業なども目先優先になりがちです。事業でいうと、空知支庁からの声掛かりに引っ張られ、肝心の施設の整備や事業費にも不自由してる一方で、ほとんど似たような別の事業に予算をつけて並立させる。わあっと行くかと思うと、もっと基本的な大切なことがあっても予算はつかない。例えば図書館も、老朽化している上に、郷土関係の図書資料や新聞原紙保存などで狭くなってきています。建て替えは、美唄も財政的に無理なのは、まあ仕方がない。しかし、炭鉱資料を含め美唄の歴史的資料の収集・整理、総合展示の母館でもある郷土史料館は、暖房施設の老朽化が進んでいる上に人件費も削減され、2009年度から冬期間の休館が決まりました。ただ、休館はしても資料整理はしなければと言って、何とか資料台帳や文書文献資料、図書資料のデータベース化は行う予定ですが、それもようやく、国の例の雇用対策二次補正予算によってです。

実は、こうした郷土史料館の現状は、資料保存や整備、研究にとっても大きな問題です。一口に炭鉱関係資料と言っても、図書館向きとそうでないものがある。例えばこれは、三井美唄文化連盟の機関誌『炭層』で、創刊号から終巻号まで遺族から寄贈された総合文芸誌です。こちらは三菱美唄文学会の『炭炎』。こういうのは図書館でも史料館でもいいのですが、閲覧できるように図書館の郷土資料室に収蔵されている。これは、先程の宮ノ下会館で発生した「人民裁判事件」の120号の記録画です。唯一の視覚的資料でもあります。美術品でもあるので市教委の絵画仮収蔵庫で保存しています。

ところが困るのは、このような、戦時下朝鮮人関係資料や戦前戦後の炭鉱『事故変災報告書』類や坑内の災害状況図面などです。個人の氏名も詳細に入っている。これは、三菱の1941年に177人が死亡した通洞坑ガス爆発の坑内図。370人の入坑者名や稼働場所、密閉地点などのほか、どこで誰が亡くなり、誰が救出されたかとか、誰が埋没されたのかとかというきわめて重要な原図です。こういった資料は図書館というわけにはいかない。図書館は公開が原則ですから。ところが肝心の史料館が、専任職員もいないし冬期間は休館など、先程話したような状態ですから、展示は別としても現物をいつまで保守・管理できるのかも心配になる。これは、炭鉱災害の坑内の様子や救助隊の写真です。関係者も写っているわけですね。これも会社側からは絶対に出ない資料ですが、この種の写真も数百点ある。あえて史料館に2～3点は展示していますが、果たして、すべてを史料館に収蔵して大丈夫なのか。文化施設や郷土史料館も大きな観光資源ですが、しかし、歴史資料の集積・保管、総合展示の常設母館としての役割を果せる整備があつてこそその話ではないのか。

また、縦割り行政の弊害は、一般市民の人

材の使い回し，使い捨てにも及びます。昨日（3月7日）の新聞によると，空知支庁が，今度は「産炭地域活性化戦略案」というのをまとめたようです。炭鉱遺産を核にして観光誘致につなげると花火を上げているのですが，地域の条件や事情が異なるのを無視してはいないのでしょうか，炭鉱遺産や資料保存に関する専門家など行政にはいない。またぞろ，

こうした事業が民間に下りてきて，タダでさえ少なくなっている人材が，口うるさく言うて迷惑がられ，はい，はい言うて使い回しする。あるいは，大事な施設整備や活動の部分がないがしろにされたまま，使い捨てにされる。そんなことにならないように，と願っている次第です。時間になりましたので終わります。